

ポール・ヴァレリイの詩 「若きパルク」について

井 上 富 江

I) 成 立

フランス詩の中で、ポール・ヴァレリイはマラルメと共に最も難解な詩人として知られる。彼の詩の製作期を大きく分けると次の3期に分けられる。^①

・第一期 1889年～1892年

即雑誌 'Petite Revue Maritime, に初めて「夢'Rêue を発表して以来詩作抛棄の年まで

・第二期 「若きパルク」"La Jeune Parque,,の製作期 (1912～1917)

・第三期 1917年以後「魅惑」"Charmes,,発表まで

この第一期と第二期までの間に横わるおよそ20年の空白の間にヴァレリイが何を感じ、何を考えたかということを考慮しないで「若きパルク」を語ることはできない。

1891年10月、20才のある嵐の夜、この一夜こそ彼に一大転期をもたらした重要な夜であった。当時イタリアのジェノアに滞在していた彼は数ヶ月前からひそかに文学抛棄を考えていた。自分自身に対するいらだちは、彼の強烈な感受性と相まって激しい嵐の光光と共に炸裂した。「恐ろしい夜—私の寢床を通り過ぎた。—いたるところ嵐、私の部屋は稲光の度に目も眩むばかりであった。そして私の運命が私の頭の中を去来した…」彼は自分の錯乱した感情に対する屈辱感を絶望する程感じ、打ち破り難い感情に脅かされつつ、この自己との対話を鋭い稲光の中で続けたのであった。そしてその一夜が明け、彼が選んだものは、「知性」であった。ひたすら明晰さをのみ追求せんと決心した彼にとって詩作は絶対のものではなかったのだ。この一夜以来彼はわずかなものを除いて詩を断ち切ったように見えた。名声や外界の変動には侮蔑のまなざしをそそぎ、彼はひたすら精神の自立状態を、精神の孤高を欲し、自己の内的世界の前進と充実をはかったのであった。毎朝の夜の明ける前に起き、まだ寝静まった家の中で諸々のことについて際限もない探求を続けた。しかし、このような彼をもう一度詩へ連れ戻す機会がやってきた。アンドレ、ジイドが^② 1912年3月彼の旧作をまとめるように手紙を出し、出版者がガリマルと共に熱心にそのことをすすめたのであった。それら旧作には何らの愛着ももたなかった彼はすぐさまその申し込みを拒絶した。しかし、ついにジイドの熱意にまけ、7月彼はガリマルに旧作に再び手を加えること、新しく出版の為に、他の詩をつけ加えるという条件で申し込みを承諾した。この「試作」"Exercice,,こそ「若きパルク」となるものであった。しかしこの「試作」は彼の始めの考えとは趣を異にし、試作に試作を重ねるうちに、とうとう4年半もの長い歳月を要し、それは512行に及ぶ膨大なものとなった。彼はこの詩の序

に次のように書いている。

「アンドレ・ジイドへ

何年来も、私は詩を放棄していた。私は自分になおもそれを無理強いする努力をしながら、私があなたにささげるこの習作をしあげた。」即、この4年半の試作は、何回かの絶望と疑惑の動揺を経、理知の力と、言語の把握を試みた彼の詩的探求の一大道程であったのだ。美しい夜景の中に歌われた「魂と生命孤独と誘惑、疑惑と確信、夢と現実、存在と虚無」は、彼の全精神を集中した自己との対話の結晶であったのだ。^⑤

「程なく世人の知る如く、突如として絢爛目を奪り名花が咲き始めた。二年の間に『若きバルク』、『オード』『海辺の墓地』『蛇』こうした確かに、我々の時代の光栄とするに足る絶佳無双の名詩と、近來まれに見る豊麗な品格ある響きの高い散文の幾多の頁とが次々にあらわれたのである。ヴァレリイがそれらの作品の制作の為に20年以上も費したと解するならば、それは甚だしい謬見である。彼はこの20年という歳月を自らの武装を整える為に用いたのである。」彼の沈黙の結果は豊麗な花として、この世に咲きいでたのであるが、その先がけをなした「若きバルク」はどのようなものであったのであろうか。^⑥

II) 「若きバルク」の展開

「若きバルク」をアランは次のように分けている。①1～5行—自らによって養われる不安。②28～49行—肉体の謎、並びに既に終わった咬傷。③50～96行—誇りの目覚め、④102～148行—叙事詩的散歩。⑤148～202行—誇りの変奏。⑥—222～257行—至上の春⑦258～279行—愛の拒否。⑧280～324行—涙。⑨299～324行—思考を強固にする不確かな土。⑩325～360行—夜明け、二重の夜明け。⑪361～380行—虚ろな場所への誇りの還帰。⑫381～424行—憂愁、葬別の歌。⑬425～464行—眠りと夢についての想像。⑭465～512行—完全な目覚め。

今少し各々の部分を展開し、その表現せんとしたものを解きほぐしていきたいと思う。

①まず冒頭の3行でヴァレリイはただ一人、風の音を聞いているバルクを描写する。すすり泣きをしているかのような風のひびきに呼応する何か彼女の中にあった。夢見心地のおぼろげな覚醒の中で、バルクは「どうしたのであろう」という疑問と同時に正体の知れぬ不安を抱くそしてこの“Qui pleure, Qui pleure,,”という自問の反復が次第に彼女を現実へと引き戻す。やがて彼女の不安な心に波の音が非難するかの如くひびく。ある時は白々しく岩にくだだけ、ある時は苦々しくのまれるこの喧噪は、バルクの心の中に養われる不安を拡大した反響であった。空には星がきらめく。「悲しみの根源は何なのであろうか。それを知らんとするピルの渴きをいやすでもなく葡萄の房は、ただきらきらと輝いている。きらめく天空、凍りついたク波、その美しい自然の中で、バルクは孤独のままである。星は渴望を増しはずれ、いやしては、くれないのだから。「涙を流させる程に悲しませ、苦しませるものは何だろうか。私は罪を犯したのだろうか。それとも私に対して何か罪が犯されそれが私を苦しめるのだろうか。」

頭の中で、ひたすらに涙を流させたものを知ろうと努める。パルクの思念の中に、星は消え、今や過ぎ去った夢があらわれる。

②夢の最初の考察が始まる。「彼女は今、夢の出現を可能にした事情を思い出す。そして彼女は同時に無感覚なる傍観者であり、視察される対象でもある夢の確かな映像を再び見る」蛇は欲望を内に秘め、はい回りパルクをうかがう。肉体の本能と知性との葛闘が蛇を媒介として描写される。肉体の感性は、パルクを認知し、それを支配せんとする。

③のがれつつもお身にからみつく蛇・「そんなものは必要ではない。たとえ廢墟の飾りであろうとも私の魂で十分だ。執拗な蛇の咬傷は、夜毎夜毎、パルクを苦しめる。魂は苦しみつつも、美しき乳房から数々の夢想の甘き乱を吸うことができる。パルクは自らの精袖の働きを狂わしめる蛇の腕から離れんことを願う。「蛇よ、そのうねりをしずめよ、誘惑せんとするその詭計をすてよ、」だがしかし、最初の不意打ちから身を起こしたパルクの本性は無意識の処女の潔壁さをのりこえようとする。眠れる精神の奥深く宿した墓ともいべき肉体がうねうねと身をくねらせ、蛇の淫慾に心を動かすのを何が阻止できようか。一方ではパルクの半身は再び理性の働きを回復し、その冷酷な視線は、そのようなパルクを鋭くさし通す。彼女の精神は目覚め、とらわれの状態から覚え知らず流した流した涙にぐっしよりぬれながらもパルクは見事に誇りをとり戻す。官能的、動物的自己を拒絶し、「調和ある自己」「*Harmonieuse Moi,*」(V103)への復帰がなされる。

④彼女は無垢なる時代をなつかしむのである。情慾など考えもせず、生気に満ちあふれ、自然と固く結ばれていた。太陽の下でパルクは自らを太陽と同等なるものと考えていた。その姿は、あたかも彫まれたカリアチドにも似て、上げられた手は太陽をささえているかのようだった。充実した大地に、しっかりと足をおろし、太陽の配偶者であると感じるパルクは、確かに世界は樹液に満ち、血官はおし広げられ、我々をつつむ自然と全宇宙が完全なる調和をなしていたと信じられる時代のものであった。場面は再び変わる。思い出は再びよみがえる。余りに強裂な明るさに出会って、先ず日は閉じられ、その暗さが場面の暗転を暗示する。そしてこの部分こそ後節に現われる「強烈な死の願い」を暗示するものであった。一方では太陽が次第によってくる。そして彼女の目も半ば開かれ、その不吉な暗転も暗示にとどまり、日の出は天空を完成し、世界はその上にまどろみ、パルクは輝く太陽の中に「とらわれた放浪者」「*Captive vagabonde..* (v.122)となる。

ここで散歩と呼ばれる回想部分が本格的に展開される。リンネルをまとったパルクの影が光の中に戯まれる。パルクは幸福なるものであった。たけ高き花々はゆれ、パルクの肉体は長い茎の上で花々とその輝きを競う。時として、いばらのとげに衣がひきさかれる時、露わな肉体に赤い花にも似た血がにじみでる。その血は他ならぬ、パルクの処女性のいきいきとした象徴であり、若き力であった。今パルクはその若き力と、無垢なる時代をなつかしむ。欲望にさいなまれることもなく、冷たい理性に心をひきさかれることもない。意志すること、即行為であ

った。思いのままに大気の中を歩み、花々をもその身に從わせたものであった。このような歩みは、パルクにとって永遠なるものと思われたのだった。パルクの目がふと足もとの影に投げられる。

「地上に投射された影は、人間の力の限界を又不吉なきざしを思わせるもの」^⑧だった。パルクはひたすらに死を思わせる影を写す地面を離れようとするのに反し、この影は、なおもパルクの肉体をミイラの如く写す。自然の生き生きとした輝きと、パルクの間に、その影がひたひたと忍びよるのを感じる。いたるところ足を運ぶ度に、その影は、埃の上をすべり、居折し、あるいは収縮し、なおも進んでいく。陰憂なる死を象徴する肉体の影は、それまでの輝かしいパルクを一変させ、パルクはやがて外界から内界へと目を向けていく。

⑤彼女は「ひそやかな虚無で武装」“*mon néans secrètement armée*,”し、即ち死の観念、死すべき人間の自己の意識」に固くとりつかれている。ほほをほてらせているが、もはや愛のためではなく、オレンジの林をぬけて来る香りに鼻をふくらませはするが、もはやそれに心を奪われはしない。

ここでヴァレリイは「この過程の中で、精神的葛藤のみならず、それに対立する自然な種々の欲望の間に起こる肉体的葛藤をも含むということを明らかにする。」^⑩純粹と不統との間に翻弄される彼女は目を閉じたその暗闇の中に、いよいよ深くその矛盾を感じるのであった。パルクは思念のとりこになる。パルクは「閉ざされた視線」,*mon regard disparu* (V160)が見るものを知る。目はただ内部のみを見ている。パルクの黒い目は地獄の入口にも似て、一度それをのぞきこむや、その中には、思念が渦まき、ピトニス^⑪は世界消滅の望みを、死の願いを唸っている。パルクは、秘密に満ちた精神の働きと、神々へのがっての熱中を、くり返しつつ、思い歩む。

ある時は祈りの為^⑫に足をとめ、又ふととめた足先に夢が宿る。しかし「この夢は、無邪気な楽しい夢想ではなく、知性の極限に描かれる夢である。」その夢は、太陽の光をうけてきらきらと輝く小鳥の姿と変し、何度も輝きをかえ、結局は、内に燃える不吉な願いをのせてはばたく。その小鳥の視線は、いよいよ深くパルクの心にくい入る。「この世界は、結局に於いて、いつも同じものにしか過ぎない。そして日々は単に考えられている限り、みじめにも、常に同じものであり、冷たく、区別なく、そして残らず既にすぎ去っているのだ。」

⑬
目が輝き、沈み、夜が来る。その単調な連続はパルクの心に何ら新しいものをもたらさないかに見える。内心の矛盾にとらえられたパルクにとって過去の朝も昼も一日も同じく繰り返しにしかすぎないのだった。今過去の日々と同じく、未来の日々を、過去のそれより新鮮なニュアンスを持っているなどとは考えられない彼女にとって生命の神秘は消滅した。パルクは半ば死んでいた。そして又半ば不死なるものであった。即、未来を予見する力をもつものは半ば不死なるものであり、そして「冷たい生は生ではないからである。」未来は冷たい不幸を表わす日々の宝石を完成させる(一きわ大きな)ダイヤモンド“*un diamant fermant le diadème*”^⑭

にしかすぎないのである。「ここで詩句の上に、1つの夢想が開かれる。この冷たい影像からひる返り、追憶を、真の時間を求める夢想が……。」暗い悲観主義から逃がれんが為に、甘い追憶の時の中に、最も好ましい瞬間を想起しようとする。^⑮意識の目ざめに苦しむパルクは、その中で夕焼けの空が、意識の森でのその惑いをやきつくしてくれることを願う。パルクの心に愛へのあこがれがうずまいていた。しかし、こうした感覚的欲求も、もはや想い出にしかすぎない。パルクの心はそれ程までに弱り果てんとしていたのだから。

⑥「彼女は思想を制御する力を矢い、神秘なる計画によって黙した死は、パルクのバラ色の肉体をつかもうとする。」のである。パルクは死に向って生の絆より一刻も早く解放されることを願う。一方では^⑯パルクの耳に春の息吹が聞こえてくる。自らの肉体になお流れようとする生の息吹を感じるパルクをウアレリイは春として、美しく描写する。無邪気なる川“la candeur”は、快い響をたてて流れ、その響と共に、大地全体に愛情が満ちる。樹々は樹液に再びふくらみ、樹皮“écailles”におおわれ、無数の枝“tant de bras”のはび広がり、太陽のふりそそぐ中に、ほこらかにその葉を鳴らす。幾千かの新しい葉が生れ、その葉の高い香りがたらこめる。大気の中にすくすくと昇っていく……。木々はお互いに名前を呼びかえし、その声が空に響きふるえる。空間に枝は錯綜し、梢で屈折し、一せいに舟をこぐかのように枝をゆすぶる。

⑦物皆がよみがえる春の激しい渦の中でいかにパルクが純粹であろうともそれに抗する力を失うであろう。情熱の嵐がパルクの身体を吹きぬける。ヴァレリーはその愛情の未来を描いていく。パルクは嬰子の亡霊から、自らの明晰な精神を守ろうとする。やがて詩は再び冒頭と同じく涙への呼びかけに帰る。

⑧神秘の涙は、人間の恐怖の洞穴から無言の水となってでてくる。涙の節は、ゆっくりと展開される。ひとみに満ちあふれ、やがてそれが流れるように……。しかし、人間としての官能や、母体への夢想などの激情の奔流の激しさと比して、その歩みはあまりにゆるやかに過ぎ、パルクを窒息させる。傷ついたパルクは涙を呼んでいるものが一体何なのかなお自問する。この涙は彼女のみならず、人間性全体をもぬらすのであった。子供達が肉体から生ずるものとすれば、涙は魂の子供である“tu procèdes de l'âmes” (V.285) 一瞬前に、人間性を激しく拒絶した彼女は、今やそれを寛容する。“mes regarde humaine” (283) あたかも苦しむことが人間性の第一の証拠でもあかのように……。しかし、ここに描かれたそれと同一のものではない。意識の思惟の結果ではなく生理的なものであり、目からでるものではなく心からでるものなのだから……。

⑨死への願いはパルクを海辺へと運ぶ。大地をまさぐるパルクは、かくも堅く、しっかりとした大地から人間は生れるものだという確信に、その力強い自然の本性の力に圧倒されるのを感じる。しかし波は、狂おしくむ投げこまれた様々な運命を沖へひいていき、やがて亡却の中に連れ去っていく。「宇宙は魂の全体を運んでいく。そして記憶を打ち消す。この海のざわめ

きこれは解放の告知であり、この詩の最も美しい瞬間である。」海をただ見ていると思う我々に波は運命を投げ、捧げ、それをかき消すというくり返しの中で、ついに我々をその流動の中にまきこむ。深淵な深みは、我々をそそのかし、砕き、存在をさえかき消してしまうのである。パルクはその際限もないくり返しにまきこまれ、ついに身をなげんとする。

⑩夜明け、しかし輝かしい夜明けではなく、白い薄暗い苦々しい夜明けである。パルクはここで一層劇的に自己と対面する。薄暗い白さの中で、島々の輪郭“les pâles lignes”は凍てついたように見える。「すでに描写された「嫌悪」と「倦怠」が“amèrement, ennui, prison, rude, inachevé”の中に表わされる。それは内界と外界の眺望を統合するのに役だつ主要な言葉である。」犠牲はついに成されなかった。パルクは自らを海に投じることもしせず、官能に身をささげることもしなかった。波に洗われて、暗礁は現われ出、一度死の世界に引きこまれ、海に身を沈めんとした祭壇“lânsel”なる海辺で、今パルクは、新たなる生存への願望を抱くのである。太陽の上昇は、とりもなおさず、パルクの心の変動の象徴であった。苦い回想に続く新たなる希望の光としてヴァレリイは太陽の朱色を持ってきたのであった。泡立つ波の上にゆれ、やがては点となっていく小舟は、范濶たる海のような精神を永遠に摸索するパルクの否詩人自身の姿であり、太陽の下にあって、それは又希望と信頼の舟でもあった。万象は厳粛なその姿をあらわし、海上にきらきらと輝き希望そのものであった。朝の光は島を、その岩を、赤々とてらし、生のめざめは、それを密蜂のごとくざわめかせる。赤い美しい遠景は、我々に今日の幸福を約束するような力強いものであった。島々は、動物や人間や森や頂きやその他全てのものをはらんではいるが、永久に処女である。島々は彼女にとって驚異のパルク達であった。即島々は海に浮ぶものである。と同時に、パルクの肉体のメタフォールであり、彼女は島々に自らの姿を認めたのであった。光に輝く島の頂は美しい。しかし、その島々のすそ“vos pieds”は、日のさしこまぬ、暗き海に没し、ここから、パルクの突然の墜落が生ずるのであった。

⑪今までに、かくまで死に心を奪われた女神はない。パルクは今真に死にとらえられる。

「死」という状態に一種の憧憬を持ち、そこに自己酔しているのだった。やがて心臓の鼓動にパルクの意識が呉収され、同一のものとなり、その鼓動が衰弱していき、死がやってくるであろう。彼女は、そんな希望を持つに至る。しかし、そんな気持も云わば一種の気どりにすぎなかった。パルクはそれを認識し、絶望する。彼女は本当に死を選んだ方がよかったのだ。そんな後悔がしのびよる。

⑫彼女の前に広がるのは、彼女が実行したかもしれない死の様相である。血という血は、彼女から去り、彼女は色青ざめて残される。しかしやがてせまる死も彼女に恐怖を感じさせることはできないであろう。彼女は気高くも死の瞬間が近づくの待つ。肉体はいよいよ孤独な彼女から遠のいていく。

⑬パルクの心の中で葬列が、墓地の糸杉の中を進む。香や香木の中で焼かれ、煙に導かれ彼女

は幸福な雲の存在と化する。「そして彼女は世界から消失し、肉体を形造る分子と混じり合い宇宙の一致の中に失われる。

394～405行にわたる表現は死が少なくとも宇宙の一部となることによって煙や香と同じく煩然とした辛宿と一体化した「絶対」という限りない形 “une form sans fin” (V.404) を得る為の一方法として考察されているように思われる。しかし、結局ヴァレリーはパルクを絶対のものとしはしなかった。彼は再び「生の力」に翻弄される人間を描くのである。死はパルクの存在をあらゆる瞬間のうちの至高のものにまで高めた。がパルクの額を輝かす夜明けの光やパルクの内に燃える「生への本能」に克つことはできなかった。パルクは今一つ新しい問題にたち向おうとする。今や純粋か不純か、死すべきか、不死であるかなどということは問題ではない。「彼女の新しい知識に自らをいかに適用するか、又眠りの意識とひき続く死の暗示に対して、彼女の目ざめた状態に意識をいかに従わせるかが問題であった」朝の光は明るさを増し夜の記憶を奪おうとする。その光に対してパルクの指は記憶の糸を奪われまいと朝と争うのであった。

⑬完全に目覚めていないパルクは今一度夢の世界へ帰っていく。パルクは又しても蛇のささやきを耳にする。そしてパルクは自らの肉体が自らの官能を裏切ったことを思う。がやがて意識は眠りの中に失われていく。この眠りの中には、もはや死の影も、冷たい批判的な知性も、激しい欲望もない。ただ新しい誕生を約束する暗さと無、生命の本源を意味するあらゆる萌芽がその眠りの中に貯えられる。これは死の如き静止であるが、死ではない。生への躍動を秘めた休息以外の何物でもないのだった。そしてわずかに残った最後の意識のはしで、低くこっそりとささやかれる夢が461～464行に描かれる。「初版で50～96行の部分と、190～202行の部分と共に3つの部分がイタリック体でかかれたが、この部分を除いて活字体に直された」これは多分「この部分が全体のモノログのうちで最も内的な部分であったからであろう。」この四行に描かれるのはパルクの眠りの中でささやかれる内なる声であり、夢である。そしてその後には深い眠りが続く。全ては沈黙。

⑭パルクは死のよきな眠りをつつむ経帳子なるシーツの上に眼をさます。「夢」での恐ろしい肉体との別れ、死は、本当に夢だったのだ。彼女の動揺する心にさしこむ日の光は夜の苦惱を半信半疑のものとする。彼女は、眠りの中で見た夢にもだえ、苦しんだのだった。涙を流すまでに……。不可解なるパルクの身体の曲線 “Arche toute secrète” (V.481) それはパルクのかくも近くにあった。このパルクが肉体の悲しい鎖をたち切ろうとしたのは本当に昨夜のことだった。しかしなされなかったその犠牲はパルクの腹を悲痛の声でゆすることしかしなかったのだろうか。ヴァレリーはここで我々の目をパルクから外界に移し、それによって詩がいよいよ新しい段階に入ることを告げる。即今まで自己と身体の各所を表わしていた “tu” は外界、彼女以外のものにおかれる。つい先程まで絶望に対して輝いていた星の光は、パルクの理解と寛容の浸透と共に、その光を消していく。太陽は、再びパルクと親しいものであった。

半ば裸体で、太陽に向かって立つパルクの心に、ヴァレリイ独自の方法で、やがて又絶望の想い出を描写する。しかしこの明と暗との対照は、詩が進むにつれ次第に描近したものとなり、次第に明るいものとなる。茫漠たる海は雄壮にしぶきを散らし、朝の力強い清新な大気の中で風は努濤のひびきをともにパルクの顔に吹きつける。激しい風が大波を打ちたおす。打ちたおされた波の上に又新たな波が荒々しくふくれあがり、その白い大きな波頭 “un monstre de candeur” を次々におし倒しつつ、岬にとどろく。波は日の光に氷のようにきらめき、パルクの思念をも洗い流すかのようにふりそそぎ、岩の上に又、パルクの肌の上に沖海の深みを打ちあげる。そのような自然の雄大な姿を目の前にして、パルクは無意識のうちに生きているという喜びを不安な心にとりもどす。太陽は又その輝く姿をあらわした。日沈からの復帰、新たな誕生は、快よくも又力強い喜びである。パルクは太陽のかがやきに呼応して輝く自らの心を讃えなければならない。パルクはよみがえった。再生のテーマは、いよいよ終局に向う。血のように赤い輝く光をいつはいに受けたパルクは、宗教的ともいえる崇厳さに、処女なる誇りをもって生への感謝に胸をいっぱいにする。あらゆるものが歎喜の光に照らされる。夜の苦々しい闘争は、実際この海と太陽のそして彼女自身の歎喜に対する序曲であった。

Ⅲ) 結 び

この詩は一夜の出来事であった。しかしそれは「むしろあり得べきすべての朝、すべての夕すべての夜を述べているのだ。そして様々な気分をもって、又勇気の回復によって、朝々の上に夜は落ち、夜々の上に暁は昇るのである。……この詩篇にあっては、全てが夜であり夢であり、想い出であるということもこれに劣らず真実である。」「そして永遠の眼覚めの歴史であり、観察し得ぬ過程である。」即、ヴァレリイの言葉に従えば「結局のところ一夜の持続間の一意識の変化であり」又「他の言葉で云えば、パルクの主題それは、意識の存在せざる推移であり、又意識による意識の掌握であり、ヴァレリイ的思考の基本的モチーフとなるものである。」そして彼が追求せんとした「意識」と「無意識」はとりも直さず彼の一生の課題でもあったのだ。「あけぼのの詩人」「le poète de l'aurore」と云われる彼は夜明けの目覚めに於ける定かならぬ意識が次第によみがえってくる状態の中で、毎朝思索にふけた。彼はいつも考えていた。「私は存在しているのだろうか。存在していたのだろうか。私は起きているのだろうか、眠っているのだろうか。」理性がはっきりめざめ、精神を制御きでる状態にあるでもなくと云ってただ眠りの状態²⁷にあって、完全に本能に従順なる状態でもない。彼はこんな状態の中でより自然な人間の精神の姿を探らんと欲したのだ。この意識の探索を詩とする為にヴァレリイは厳格な形式上の諸条件を課した。十二音綴の厳格な区切りは、彼が背景に選んだ波の如く規則正しいものであった。しかもヴァレリイは執拗な推稿によって、詩の中のもろもろのものがでてくるべくして、でてくるよりに構成したのであった。それは、いわば建築的とも云えるものであった。外界のもの即、風の音、波の音、太陽、蛇、全て互いに強いつながりを持ちパルクの心理的闘争を強めこそすれ、その調和をみだしはしない。昌頭の暗さから暗示に満ち

た外界の発展は即パルクの意識の徐々なる現実化であった。その意味でイタリック体の使用もパルクにささやく最もひそやかなる声を表わすには不可欠なものであった。厳正な韻の中に、音と、色彩と、匂いは常に、底に流れる心理の変遷を象徴するものであった。そしてヴァレリイの言に従えば「良い心で術策が弄ぜられることはない。しかしそれにも増して、放心と夢想のうちに、これ程貴重な、これほど稀有な調整が言葉に課せられることはないのである。真の詩人の真の境地は、夢想状態とは、およそ判然と相異なるものだ。私はそこに意志的に探索し、思考がしなやかなり、微妙な種々の拘束に対して、魂が同意し、犠牲が絶えず勝利を得る。ということ以外のことはみないのである。」つまりヴァレリイは彼の師ともいうべきマラル人の開いた詩の路線を更に発展させ、意志による詩の把握^②を心したといえよう。ヴァレリイにあっては、俗にいう靈感は、信じるにたるものではなかった。ヴァレリイはいわば無償の賜物とも云えるこの靈感を拒否し、それを厳正なる知覚の中に入れ、探索し、練磨してより、完全な効果をねらったのであった。しかもそれは彼が *moduration* と呼ぶ詩の流れをせきとめるものではなく、むしろその構成を計算に入れた精神の所産であった。

異教の女神「パルク」を題とした、この詩は、その意味で、彼の詩作と、詩論の確立への、貴重な先駆をなしたものといえよう。

- (註) ① Stéphane Mallarmé. (1842—1898)
- ② “Notes Personnelles” Paul Valéry, oeuvres Tome I (P20)
- ③ André Gide (1869—1951)
- ④ Paul Valéry : oeuvres Tome I P96.
- ⑤ Henri Mondor : “Discours de Reception à l’académie Francaise, 11e 30 octobre 1947
- ⑥ F. Lefèvre : Entretiens avec Paul Valéry P21.
- ⑦ Hubert Fabureau : “Paul Valéry” Poésie Choisie
Des Notes Explications P22.
- ⑧ H. Fabureau : op.cit P24.
- ⑨ 「ポール・ヴァレリイ」鈴木信太郎 P258
- ⑩ Francis Scarbe : “The Art of Paul Valéry” La Jeune Parque P217.
- ⑪ “La Pythie” 1918年にかかれた。(oeuvres Tome I. p41)
- ⑫ 「若きパルク」矢内原伊作 P161
- ⑬ Alain : “La Jenne Parqne • Poème de Paul Valéry” P86.
- ⑭ Alain op.cit P86.
- ⑮ ibid
- ⑯ Fabureau : op.cit P27.
- ⑰ Alain : 1p.cit P106.
- ⑱ Francis Scarbe. op.cit P220.
- ⑲ 神話のパルクは人間の生命を司る地獄の女神であり、クロートは生命の糸をつむぎ、ラケシスは運命の糸をつむぎ、ストローポスはその糸をたつ。ここでは鳥々をパルク達と呼んだのである。
- ⑳ Fabureau : op.cit P30.
- ㉑ Francis Scarbe : op.cit P227.
- ㉒ ibid P231.
- ㉓ Candeur <L.candor (blancheur) ㉔Alain : op.cit PP134~136.
- ㉕ F. Lefèvre : op.cit P61.
- ㉖ E. Noulet : Paul Valery (Esudes) P66.
- ㉗ “Un Feu Distcnet” en l’Album de Vers Anciens. oeuvres Tome I. P81.
- ㉘ Variété. oeuvres Tome I. op.cit P416.